放送ライブラリー24

森野宗明

伊勢物語の世界

放送ライブラリー24

伊勢物語の世界

発行——昭和五三年十一月二〇日　第一刷発行
著者——森野宗明　© 1978 Muneaki Morino
発行者——藤根井和夫
発行所——日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一—一　郵便番号一五〇　振替・東京一—四九七〇一
印刷所——三秀舎印刷株式会社　近代美術
製版所——廣済堂印刷株式会社　製本所——田中製本
レイアウト——高須賀　優
装幀——杉浦康平＋鈴木一誌
定価——九八〇円

検印省略　落丁・乱丁本はお取替えいたします

森野　宗明
一九三〇年　東京に生れる
東京教育大学大学院修了
現在、青山学院女子短期大学教授
主な著書
『王朝貴族社会の女性と言語』
『伊勢物語』（講談社文庫）

森野宗明

伊勢物語の世界

送ライブラリー24

日本放送出版協会

伊勢物語の世界——森野　宗明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

はじめに――6

第一回―初冠――14
第二回―月やあらぬ――34
第三回―あづまのかた――56
第四回―みちのくに――82
第五回―井筒――98
第六回―あづさゆみ――118
第七回―うらわかみ――134
第八回―みたらし川――146
第九回―狩の使ひ――170

第十回—惟喬親王——196
第十一回—さらぬ別れ——218
第十二回—老いらくの道——230
第十三回—ちはやぶる——242
第十四回—つひにゆく道——254

おわりに——264
和歌索引——269

はじめに

昔、紫式部は、『源氏物語』のなかで、『竹取物語』を指して「物語の祖（おや）」と呼びました。「物語の祖」を云云するならば、古さという点では少少及ばないようですが、ぜひ取り上げたい作品がもう一つあります。これから皆さんを、その文学的世界へと御案内することになる『伊勢物語』がそれです。王朝貴族の哀歓を精細に描いて、平安時代の文化を彩（いろど）っている数数の物語を貫き流れる情感を一口で言うなら、みやびの感覚に支えられた、いわゆる「もののあはれ」ということになるでしょう。その繊細優美な情緒美の系譜を溯って行くと、行き着くところが『伊勢物語』なのです。『竹取物語』を、父方の祖（おや）とするなら、『伊勢物語』は、さしずめ母方の祖ということになりましょうか。

『伊勢物語』に横溢する繊細優美な情感は、この物語の魅力の源泉とも称すべき珠玉の和歌の数々にみごとな結晶を見せますが、それはまた、主人公の個性と無縁ではありません。この主人公、この作品を形成する百二十五の話の多くが、「昔、男……」という形で始まるところから、「昔男」と呼ばれます。「昔男」の人物像は、大づかみにしていうなら、二つの点で読者を魅了いたします。一つは、奔放不羈の精神です。貴族社会の固定化、沈

滞化とともに、しだいに衰弱し枯渇していくこの精神、「昔男」には申し分なく宿っていまして、しばしば彼を華麗果断な行動へと駆り立てて、鮮烈な印象を与えます。もう一つが、この繊細で優しい心、豊かな情感です。「みやび」な振舞を通しての、「もののあはれ」の体現者とでも呼び得るような「昔男」のイメージを、百二十五の話のあちこちから掬い上げて挙示することは、いともたやすく、決して困難な仕事ではありません。そして、『源氏物語』その他の物語群の主人公たちの面影には、程度の差こそあれ、つねに、この「昔男」のイメージと重なり合うところが見いだせると申しても過言ではないでしょう。

さて、『伊勢物語』といえば在原業平、在原業平といえば、『伊勢物語』。主人公「昔男」は、久しい昔から実在の人物在原業平を指すものとして捉えられています。それは、単に読者のがわがそう勝手に思いこみ、きめこんでしまったというようなものではなく、そもそも、この物語の作者自身が、「昔男」の人物像を形象化するのに際して、在原業平を念頭に置いていたと思われます。さらに踏み込んで、この物語の原型の作者じたいがすなわち在原業平その人であって、この作品、もともと、自伝風物語あるいは物語化された自伝だったのだとみる説もあるくらいなのです。物語の世界へ皆さんを御案内するのに先だって、ざっと、この在原業平なる人物についてお話しておくことにいたしましょう。

在原業平。平城天皇の皇子阿保親王の五男として、桓武天皇の皇女で阿保親王の叔母にあたる伊都内親王を母に、天長二年（八二五）に生れたこの人物の事蹟は、事務的な履歴書なら作成できる程度にわかっていますが、評伝でもものしようとすると、材料不足で往生

します。官歴はある程度たどれるのですが、元慶四年（八八〇）、数え年の五十六歳でその生涯を閉じるまで、人間としてどう生きたのか、よくわからないことが多いのです。

生れた翌年に在原姓を賜って皇族から臣籍に下った業平がどのような人物であったのかを考えるうえで参考になるのが、宇多天皇の命を受けて、藤原時平や菅原道真などが編修し、延喜元年（九〇一）に完成した正史『三代実録』にみられる業平の人物を評した短い文章です。

「体貌閑麗、放縦不拘、略無才学、善作倭歌」。これがその評言です。風采はといえば非の打ち所のない上品な美大夫なのだが、きまりやならわしなど、とんと無視した自在の振舞が目立った人、男性貴族なら大いに励むことが期待される漢学の方面は留守がちで、公ならぬ私の世界の恋の媒介である和歌に血道をあげて、そちらの方面では抜群の才能を発揮した人として捉えられていたことがわかります。

『三代実録』の編修者は、『文選』に収められているある作品を念頭に置いてこの評言を綴ったように思われます。『文選』は、六世紀に中国で編纂された詩文集、昔の知識人にとってもっとも馴染みの深い漢籍の一つです。そのなかに、西暦前三世紀の著名な詩人宋玉の「登徒子好色賦」なる有名な一篇があります。宋玉は、美男にして艶聞に富む詩人としてよく知られた人物ですが、この作品に、登徒子なる人物を仮構して登場させ、宋玉の油断のならぬ好色ぶりを国王に告げ口させる場面を冒頭に描きます。「あの人は風采は申し分のない上品な美丈夫ですし、また人の心をうっとりさせるような美しいことばを連ね

て、巧みに詩をつむぎ出す才能も大したものです、でもたいへんな好色。国王よ、あの男を伴ってお妃たちのおいでの所には決しておでかけあそばしますな……」というのがその告げ口の内容ですが、そこにあの「体貌閑麗」という表現が用いられているのです。そうどこにもざらに見あたる表現でもありませんし、このよく知られた「登徒子好色賦」を下敷きにしたとみても、あながち見当はずれでもありますまい。

なぜこの作品から字句を借りたか。推理をたくましくしますと、在原業平の人物、行状は、『三代実録』の編修者たちにとって――ということはさらに拡げて、業平没後間もなくの頃の貴族社会の人々にとってといってもさしつかえないでしょう――、かの登徒子語るところの宋玉像を彷彿させるものがあったのではないでしょうか。まかりまちがえれば、たとえば帝妃とでも容易ならぬ問題を起こしかねないような、おとなしい常識人からみれば、ただ唖然とするほかないような、愛の世界における放脱ぶりを物語る数々の逸話が伝えられていたのではないでしょうか。

とすると、『伊勢物語』のなかでもとりわけ強烈な印象を与える話のいくつかが、にわかに大きく浮かび上ってまいります。たとえば――いや、やめましょう。それは後でじっくりと味わっていただきましょう。どのような逸話が伝えられていたのか、それがまさしく事実を伝えたものかどうか、それを、しかと明らかにするてだては、残念ながらありません。しかし、そうそう火のない所に煙ばかりが立つということもありますまい。すくなくとも、在原業平という人物、類まれなる愛の狩人、恋の冒険者として物語の主人公たるに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ふさわしい雰囲気を濃厚に醸し、まとった人物であったらしいことだけは、たしかとみてよろしいでしょう。

「放縦不拘」も注意を惹きます。『三代実録』にはもう一例の用例があります。豊前王なる人物についての評語のなかにみえるもので、具体的には、法律の規定を無視して、特定の有資格者にしか許されていない紫色の着衣を平気で身につけていたという事実に即して、「放縦不拘」が用いられているのです。きまりやならわしなど頓着しない不羈放脱ぶりを指すのがこの「放縦不拘」であるようです。在原業平の不羈放脱ぶりも相当なものだったのでしょう。

ただ、ここに若干の懸念が残ります。『三代実録』の編修者たちは、『伊勢物語』の影響を受けたのではないかという懸念です。『伊勢物語』の原型は、『三代実録』以前、九世紀末には成立していたと考えられますし、後世の人人の捉え描いた業平像が、『伊勢物語』を業平の事蹟を録したものとして読み、その圧倒的な影響のもとに形成されたということも、まずまちがいないところです。しかし、業平没してまだそう長い歳月も経ておらず、彼を実際に知る人もそれなりに生存していた頃に編まれた正史が、『伊勢物語』に拠るのみでその人物評を草したかどうか。『伊勢物語』は『伊勢物語』として、それとは別に、逸話の伝えられることが多かったのだろうとみる方が、やはりしぜんだと思われます。

「善く倭（和）歌を作る」というのも、興味深い評言です。正史の人物評で和歌の才が特記されているのは、きわめて特異なことなのです。彼の歌才は、おそらく祖父平城天皇

の、そして母伊都内親王の血をひいているのでしょう。紀貫之（きのつらゆき）たちは、『万葉集』は、平城天皇の命による勅撰集であると思いこんでいたようですし、この、こよなく旧都平城京を愛した天皇は、平安時代初期の天皇のなかでは、きわだって豊かな歌才に恵まれた方だったようです。伊都内親王も、なかなかの歌人だったようで、その一端は、これから御案内する『伊勢物語』のある話にうかがうことができます。

いや、前口上が長過ぎました。また少々在原業平にこだわり過ぎた気味がなくもありません。作者の意図は意図として、この作品、業平についての知識を前提にしなくてはまったく読めない、というわけでもありませんし、業平を離れて読んでみるというのも、一つの現代的な読み方でありましょう。鑑賞を助けるうえで必要なことがらは随時触れることにいたしますが、皆さんは皆さんで、自由にお楽しみいただくのもよいかと思います。

では、『伊勢物語』が描く「昔男」のさまざまな物語、代表的な段に的を絞って読み味わっていただきましょう。

なお、以下に引く『伊勢物語』の本文は、現在普通に読まれている天福（てんぷく）本と呼ばれる系統のそれに依っています。底本としては、学習院蔵の定家筆と伝えられる古鈔本を影印した武蔵野書院刊『伊勢物語』（鈴木知太郎氏校註）を利用しましたが、仮名づかいを改めたり読みやすさを考えて仮名に漢字をあてたりなど等手を加えてあります。他本によって、わずかですが、字句を改めた箇所もあることをお断りしておきます。

伊勢物語の世界

第一回 初冠